

# まんじ語録 (その二)

新井 宏

世に、世界の四大聖人として、釈迦、キリスト、孔子、ソクラテスの四人の名前があげられているが、この四人とも、ほぼこの前後に生れている。

(94号、三戸岡道夫、孔子春秋)

臉の内側が燃えるように明るくなつた。仰天した雅量  
は、思わず悲鳴をあげかけたが、舌が痺えるだけで声が出ない。雅量の臉の裏で、赤い炎が燃え盛る。真っ赤な炎が次第に割れて人の姿がおぼろに見えた。

(94号、森下征二、茉莉花伝)

わが国や中国の政治上の人物評価では、大衆の受け止め方は敗北者への同情と覇者への誹謗が必ず対になる傾向がある。

(94号、隆恵、敗北者賛美と勝利者誹謗)

……後白河という人は甚だはた迷惑な御仁であった。

(94号、隆恵、敗北者賛美と勝利者誹謗)

通常、これらの地方史を素材にして作家はイマジネーションを働かし小説をものにするのだろうが、この場合は全く逆。一人の著名な作家の一作が地方史を作り上げてしまっている。

(94号、山田嘉久、闊寛斎のこと)

茶会に集う人達は他人の持物のアラを探し出す嫌な性がある。

(94号、忠内正之、古い物・遠い夢)

「もし、息抜きが必要でしたら……」  
「いえ、いつも息抜きですから。」

(94号、松下壽男、残暑見舞い)

清貧を説きて市井に生きし作家

中野孝次逝くいと密やかに

(94号、石黒修身、行雲流水)

おそらく彼の出家も長続きはしまい。いずれ然るべき口実をもうけて俗界に戻ってくるにちがいない。この期待は不思議と小町を安堵させた。しかし、遍昭は戻ってこなかったのである。

(94号、島津隆子、小野小町物語)

惚けは死の恐怖から逃れるモルヒネなのかも知れない。

(94号、太田和貞、丙午の女)

「……捕まえていったいどうするつもりなのだ。家で飼うのか」「いいえ、たべるんですよ。鼠は結構旨い動物ですから」

(94号、太田精一、遙かなるカメルーン)

沼田少佐の罪名は俘虜虐待を黙視、放任したという責任であったが、虐待にもいろいろある。不十分な待遇が即虐待の汚名になるのも、敗戦国なればこそであろう。

(94号、紙透寛夫、紙透家の人びと)

金持ちがパライソに入るよりも、駱駝が針の穴を通る方がまだやさしい(新約聖書マタイ伝)

(95号、鍋屋次郎、針の穴を通った駱駝)

子路は孔子よりも九歳も若く、武勇を好む、粗野で気の荒い青年だった。まるで任侠の世界にいたかと思える乱暴者であり、孔子の塾を武道塾とでもまちがえたのか、鶏の羽をつけた冠をかぶり、豚の皮で飾った剣を付けるという異様な格好で乗り込んできた。

(95号、三戸岡道夫、孔子春秋)

街角公園けやきの木陰

書店のまえも素通りに

汗をふきふき水を飲み

そうだおでんを食べに行こう

(95号、松下壽男、友に寄す)

子供のころ幸次郎は、父正義は生きながらにして銅像のようだと感じたことがあった。……父は大きく固く、中に虚心を湛えている。だからこそ打てば響くのである。

(95号、松下壽男、ロダンの二宮金次郎)

十死零生の呪縛を解かれた生残り組は、国家ぐるみの

精神統制で純粹培養されたそれまでの価値観を全面否定する社会構造の変化に途惑いながら、挫折感と劣等感とを引き摺って新しい時代を生きて行くことになった。

(95号、千坂精一、神風特攻隊の人びと)

かかる状況下、拙作が突如出現した。序章以下全二六篇、総字数七二八言の長篇叙事詩に驚かれた参加者も多いと思う。私の知る限りこれより長い詩は……「千字文」を詩として参入しても世に七篇しかない。

(95号、鯨游海、潮騒録)

この語録には、新井氏の言葉も解説もないが、まんじに寄せる新井氏の愛着が感じられ……

(95号、太田精一、編集後記)

ついでにいうと司馬作品に「忠臣蔵」は登場しない。

(96号、山田嘉久、街道をゆくのか荻生徂徠)

夫婦して乗るのかと言う顔付きで

サハラの駱駝やれやれと立つ

(96号、石黒修身、行雲流水)

人の仕事とはなんだろう。どんなに理想に燃えた仕事でも、終りは突然やってくる。では人の仕事とは、なし

とげられたことがらで測るものなのか、それともなしとげられなかったことがらで測るものなのか。

(96号、松下壽男、ハート・トウ・ハート)

晏嬰のように泥にまみれて政治をし、国を運営している者から見れば、孔子の政策は政治の現実を知らなすぎるし、甘っちょろく、理想論すぎて、独善的にしか見えなかつたのである。

(96号、三戸岡道夫、孔子春秋)

小町の情熱にもようやく枯渇が見えはじめる。子もなく、定まった男性もないわが身を、舵のない舟に置きかえてみたりする。もはや今ひとたびの命の灯を掻き立ててくれる男性に巡り逢うこともないだろう。

このような時、小町の許に一首の和歌が届いた。

(96号、島津隆子、小野小町物語)

商品としての奴隷は、この島に「収容」ではなく「貯蔵」されていたのだ。

(96号、太田精一、遙かなるカメルーン)

遂に得し詩礼知る人足げやに

われを遣して逝きて帰えらじ

(96号、鯨游海、潮騒録)

実名か、ペンネームか、あるいは最初の宮仕えの時の女官名か、それとも二度目の折のものがいいのかと、定家に問われた彼女はこたえた。

言の葉のもしこの世に散らば忍ばしき

昔の名こそとめまほしけれ

(97号、島津隆子、平家の女・和歌に託した人生)

当世風にいえば、「きれた」のである。

(97号、千坂精一、裏切られて)

子路は単純なおとこであるが、もともとは武闘派の人間なので、戦いのこつは心得ていた。勝つ方に乗るのが、軍事の定石である。

(97号、三戸岡道夫、孔子春秋)

天皇自ら異国人と会見し、外交上の裁断を下すべきではない。天皇自ら対応すれば逃げ場がなくなる。外交実務は然るべき者に任せ、天皇が直接責任を負ってはならない。

(97号、森下征二、茉莉花伝)

正統派美人と気さくな美人。……欲張りな私は、両方になりたい。欲張りな男は、両方が欲しくて、二人の間を行ったり来たりするのではないか。

(97号、森実与子、三つのコンサート)

人が歴史を、歴史が人を作るのか

永久のテーマに秋思尽くせず

(97号、曾根竣作、流離の渚)

わが妻は幼な児にして北辺に

果てし父の面差し臆ろ

(97号、石黒修身、行雲流水)

麻薬の匂いのしない一流ジャズメンがいったい何人いるというのか。……国務省はどうやってその問題を解決したと思うかね。……世界的な麻薬シンジケートと手を組んだのさ。ツアーの先々で確実に麻薬が手に入れば、ミュージシャンは麻薬を持ち歩く必要はない。

(97号、松下壽男、ハート・トウ・ハート)

膨大な作品を遺した司馬だが、意外なことに彼の作品中から「関東」(特に私の故郷千葉県)に係わる事件や人物を引き出そうとすると、これが簡単なようで簡単でない。

(97号、山田嘉久、九十九里浜で泣いた司馬)

「まんじ」は……すでにインダス文明時代の人がつ

かっていた。……が、それは卍ではなくてナチス・ドイツの標幟であった逆卍である。皮肉なことには、卍の起源は、ユダヤ人の属するセム族のうちにあった。

(97号、中山喬央、還暦からの考古学)

瀏陽市は人口百三十万人、花火工場が七百から八百あり、世界の花火の六十%を生産している。……九割が輸出で、日本との取引は殆どない。

(97号、吉田忠雄、花火の町瀏陽をたずねて)

私は日本人です。フランス語、英語、スペイン語などは外国語で書類作成までに時間がかかりますし、私のこの憤りを適格に表現することはできません。したがっていまして日本語で書類を作成させて頂きます。

(97号、太田精一、遥かなるカメルーン)

江戸時代、一流中の一流といわれた辰巳芸者は、その粋を誇るために、冬でも足袋をはかずに素足で歩いた。逆に夏は羽織を着たので、羽織芸者ともいわれた。辰巳芸者は一流芸者の粋を誇るため、意識的に暑さ寒さに挑戦したのである。

(98号、三戸岡道夫、うどんげの花)

右近殿、その十ヶ条は、最初に言われた神はただ一人

と言うことと、最後に言われた七日に一度の休みとを除けば、至極当たり前のことではないか。何故八百万の神ではないいけないのか。

(98号、鍋屋次郎、針の穴を通った駱駝)

コルトレーンの演奏は、音で時間を埋め尽くそうとしていた。時間をねじ伏せて、支配して、永遠を手にいれようとしているかのようにであった。

(98号、松下壽男、ハート・トゥ・ハート)

一二四二年ベーコンは黒色火薬に関する最も重要な論文を書いた。これは暗号によって書かれた。そのため十九世紀末まで、その内容を理解することができなかった。……中世では火薬を扱う人は危険人物とみなされていた。

(98号、吉田忠雄、花火の歴史を楽しむ)

宅急便の歴史は行政との闘いの歴史であった。

(98号、伊治哲、ベンチャーの先駆者逝く)

エジプトの穀物と金は外交的な手紙にもしばしば現れており、軍事力以上に力がありました。

(98号、中山喬央、還暦からの考古学)

外つ国に嫁ぎし吾子の筆躍る  
伯仲長じ季さらに肥ゆと

(98号、鯨游海、潮騒録)

わたしは、一九二八年、ドイツ生れのスタインベルク・ピアノ。人間でいえば今年七十七の喜寿を祝う歳です。……一時は廃棄の運命を辿る寸前のところまでいきました。ところが、どういう巡り合わせか、わたしは今すっかり若返って昔の音色を取り戻したばかりか、華やかな舞台に立つことができるまでに復活させてもらうことができました。

(99号、伊治哲、わたくしたちはスタインベルク)

照る日、曇る日の唱えは  
大衆に題名だけでも語呂うけ  
する性格を持っていた。

(99号、大和禎人、湯漕ぎのうた)

夢か、狂気か、幻なのか。実朝にとっては  
宋渡の動機などどうでもよかった。

自身を取巻く多くの惨状から、どこへでも  
いい、脱出できさえすればそれでよかった。

(99号、島津隆子、暗殺の叙事詩)

筆者は、報徳に関する文献類を読み進め、報徳思想を

理解するにしたがって、『尊徳は巨大なり』の思いが一層深まっていた。

(99号、堀内永代、報徳仕法と企業経営)

すると民主主義というのは、親に感謝する必要はない。親孝行をしなくてもいい、兄弟はけんかしろ、仕事はだらだらと怠ける、親戚は仲悪くなれ、お金はむだ使いせよ、ということなのでしょいか。日本って変な国ですね。

(99号、三戸岡道夫、うどんげの花)

美の基準は人によってさまざまであり、また好みもさまざまであるが、私の三大美女は、入江たか子、山田五十鈴、原節子の三人である。

(99号、三戸岡道夫、うどんげの花)

井戸茶碗になり澄ました秋茶碗の名品がかなり埋れているのではなからうか

(99号、忠内正之、古い物・遠い夢)

「臣下の命運は主君しだいできまるもの。奇らば大樹でござるよのう」

その物言いは、信吉に上杉離叛をすすめているようにも受け取られた。

(100号、千坂精一、大樹を渡り生き抜いた男)

思温が見つめた。青い瞳を懸命に見つめた。若い思温の激しい思いが彼女の上に一気に注ぐ。思わずうろたえた太后が、剣を離して身体を後に引いた時、思温の潰れた左目から涙が一滴微かに落ちた。太后の胸に、思わず熱いものが込みあげる。潰れてしまった左目から、どうして涙がでるのだろうか

(100号、森下征二、断腕太后)

妓王が涙を抑えつつ下がったあの日、仏御前は改めて召されていた。そのとき初めて妓王が障子に残した「いずれは秋にあはではつべき」の歌を局の中にみつけた。これを読んで仏御前は全身を打たれたような気がしたので。

(100号、相原精次、いづれか秋にあはで果つべき)

伝言は、古谷太郎だけでじやなくて、ぶちや自身のもあったんだ。もう俺達も八十歳に近い、余命もいくばく。大村は全部吐き出して、二十二分隊の少年兵当時の清純な気持ちに戻りたかったんだよ

(100号、鈴木昭三、六十年目の伝言)

藤五郎はまず馬の耳元で何事かささやき、……今度

は、馬の正面に立って、じつと馬の目を見つめる。動物はなんでもそうだが、目を合わせる行為は威嚇するのと同じである。……正気の沙汰ではない。……が、馬はじつと、藤五郎のことをみつめ続けている。

(100号、瀧澤中、まんじゆう奉公)

バスク地方に異常な関心を示す司馬だか、彼にはバスク人を取り扱った小説まである。短編「奇妙な剣客」は平戸に上陸したバスク人の剣客の物語である。……この小説を司馬が書いたのは昭和三十七年、「南蛮のみち」を旅した二十年前のことである。

(100号、山田嘉久、「南蛮のみち」をゆく)

わたしは詩人ではない

これが 詩であるわけがない

そう言いつつ 詩を創る

(100号、青木昭成、この町・他)

昇りゆくエスカレーター側壁が

写せり己が時のたしかさ

(100号、曾根竣作、湘々湖南)

念の為と思ひ辞書を引いて愕然とした。不が元来は「大きい、多くの、はなはだ、しばしば」等の意味だっ

た事をその時始めて知った。

(100号、鯨游海、聖徳銀行秘書室)

そもそも異説を出すのは余程の自信と職を失なうかも知れない覚悟が必要です。その点私達のように本業が別にある者は気が楽で却って本音で勝負出来るのです。

(100号、鯨游海、聖徳銀行秘書室)

「待つててくださいね。……お昼、待つててください」  
……お昼を一緒に食べようってことなのかしら、私はどきまぎしながら聞き返しました。「どこで待つていれほしいんですか……」。すると先生は、驚いたような奇妙な表情を見せ「違います。すぐにお昼を食べないで、……」

(100号、森実与子、歯医者さん)

死とは、全ての者が共通に受け入れることができる唯一の理解なのだ。

(100号、松下壽男、新美先生のこと)

深草信也は経済という素材を使って、芸術の創造をやっているのだ。

(100号、三戸岡道夫、極楽楽園)

「量より質」という言葉があるが、「質より量」もまた真である。量もそのポリ、ユームがふえると、そのエネルギーが質に変化するのである。

(100号、三戸岡道夫、あとがき)

女性は時として悪魔にもなり、天使にも変貌するものだ。しかし、その女性がどこから天使になり、どこから悪魔になるのか誰も知ることができない。

(101号、島津隆子、将軍義政と愛妾)

強者の側に立ったときの女の傲慢ぶりこそ、女が動物に近いといわれるゆえんだ。

(101号、島津隆子、将軍義政と愛妾)

右近が絶対に許せないと思ったことは、秀吉にとってお吟の死の「バツの悪さ」である。お吟の美貌を聞いて側女としようとして、死をもつて反抗されたその「バツの悪さ」は、利休がいる限り続くものである。

(101号、鍋屋次郎、針の穴を通った駱駝)

果てしなく続く広大な遠州灘をながめながら遙か彼方から聞こえてくる潮騒の音は、子守唄であり、青春の賛歌であった。

(101号、松下魏三、赤堀四郎博士の一生)

なぜか、金沢の中心街といわれる香林坊に隣接してわたくしたちの学校があった。まるで銀座四丁目に隣合せて学校があるようなものだ。

(101号、伊治哲、金沢からまたひとつ昔が消えた)

古王国時代のファラオの彫像は永遠の地位を約束された自信に満ち溢れたものでしたが、中王国時代のそれは、その地位が永遠のものでない事を知っている一人の人間として描かれています。

(101号、中山喬央、還暦からの考古学)

専門分野だけに特化し、特異な才能を発揮する人材は古今数多く輩出しているが、総合力で秀でる光悦に勝る人物はいない。

(101号、忠内正之、古い物・遠い夢)

私大出の私が東大赤門をくぐるのはこれで二回目である。

(101号、山田嘉久、「本郷界限」を歩く)

伊豆学の泰斗佐東三博士は、(伊豆半島を)あたかも成人女性の子宮を逆さまにしたような形だと表現している。筆者はその神秘的胎内を見たことがないが、なんとなくそのような気がする。

(101号、堀内永代、風説天城の鬼火)

チャイ出され値切り交渉ややありて

トルコの石を妻は買いたり

(101号、石黒修身、行雲流水)

「右行く先頭四つ右へ、距離五百」

対戦車砲の号令忘れず

(101号、曾根竣作、一兵として)

アツ草が無事に今年も芽吹きを見て、赤い可憐な花をつけた。二鉢がミニ盆栽よろしく、他の大方枯れ果てた鉢物の中にあるので、いっそう奇跡であり……。アツ草の値段はたったの五三〇円なのであった。

(101号、大和禎人、アツ草幻想)

昨今の歌壇は、専門歌人から一般の歌人に至るまで、少しでも目立つような前衛振り、その反動としての、「ただごと歌」が多く、混迷を極めている。

(102号、石黒修身、行雲流水)

「大菩薩峠」の挿絵を描いた石井鶴三さんが独自の挿絵画集を世に問うことがあった際、気難しい作家中里介山が激しい抗議をよせた……

(102号、大和楨人、挿絵界の春秋)

しかし潜在する意欲は消えるものではない。欲しいものは欲しいのである。

(102号、忠内正之、古い物・遠い夢)

一世を風靡した唯物史観も、それが史料として使えたのがモルガンの古代社会だけであつた為、その後の様々な研究によって、考え方を変えなければならなくなつた。

(102号、中山喬央、還暦からの考古学)

神の教えを地球上にあまねく広めようとした「神聖境界」はその最終的地であるジ・パンクで皮肉な結果を招いてしまったことになる。

(102号、山田嘉久、司馬遼太郎の紀行文)

俯瞰する城下の町並みは、ひっそり沈んでいた。

峻険な山々に囲まれたその盆地は、出羽国置賜郡米澤藩十五万石の城下町である。

(103号、千坂精一、たまごの鼓)

運命とは一つの実感である。いや、実感でしかないと言つた方が当たっている。この投げ捨てた言葉にこそ、人

生の無常観がこめられている。

(103号、島津隆子、草庵に結ぶ夢)

ちよいといかさま気味であるが、器用な大道芸人が見世物をやりながら抜菌をしたことが記憶に残っている。

(103号、堀内永代、伊豆の菌科医業の祖)

汝がために作られし曲をゆつたりと

「館野泉」は左手で弾く、

(103号、石黒修身、行雲流水)

ワカンナイっていう言葉なら俺にもワカルヨ。でも、何がワカンナイって言っているんだい

(103号、松下壽男、ハート・トウ・ハート)

買えなかつた後悔は、買った後の失望の悔いと比べても先の方が遥かに辛いものである。

(103号、忠内正之、古い物・遠い夢)

日本人と知った皇太子は「何のために此処にきたのか、日本の何処から」と聞いたようだったが、私は皇太子よりも美しい妃殿下の握手を選んだ。

(103号、山田嘉久、「オランダ紀行」をゆく)

秀吉はあの世で官兵衛を五大老の一角に入れて置けばよかつたと臍を嚙んでいたであらう。

(103号、平山恵敏、司馬史観の黒田官兵衛)

考えてみれば、初めから食いものにするなどと公言して買収に乗り出すようなお人よしはどこにもいるはずがない。

(103号、伊治哲、法は最低の道徳)

哀悼白川静文學博士……

誤てる説文解字糾了へ研精覃思白寿まえ逝く  
讚荒川静香選手五輪金杯……

イナバウア胡蝶の舞に秘められし

拮据の血指知る人ぞ知る

(104号、鯨游海、潮騒録)

では無官の平民が全財産を献じたという先例がありましたでしょうか

(104号、三戸岡道夫、あばれ天龍)

文章を取扱う部署の者たちには、文章は意味が判ればよいとして、修飾語はいっさい使わず、簡潔にするよう指示して、美辞麗句を思考する無駄な時間を省かせる。これは現在の物書きにとっても耳が痛い教訓である。

(104号、千坂精一、たまごの殻)

遺されし人の心を癒す詩

「千の風に」は詠み人知らず

(104号、石黒修身、行雲流水)

真島教授は実験を重視し、理論には慎重で冷淡に思えるほどで……難しいことや創造的なことでなければ関心を示さないし、また人の真似でない新しい考えがあれば評価し、そのような内容がなければ成功しても関心がなかった。このような学風が四郎に染み込んで後年の弟子達にも伝わった。

(104号、松下魏三、赤堀四郎博士の一生)

岩手弁は日本の標準語からは掛け離れておりますが、英語の発音に似ておるのです。

(104号、松下壽男、ホメラレモセズ……)

今回も、合評会の予習としてマークした皆さんの文章から語録を作成しました。その結果、合評会にお見えない方の分や、筆者が欠席した会の分は、どうしても引用が疎になったようです。なお、題名部分はスペースの関係で勝手に短縮させて頂いた場合がありますが、ご了承下さい。